近作小説二三に就て

夏目漱石

近作小説二三に就て

私はいつも多忙であるために、諸方から寄贈される雑誌や小説をことごとく読むわけにはいかぬ。しかし近ごろは小説を書く人も多くなり、したがって小説の数も殖(ふ)えて面白(おもしろ)いものも出るようであるが、私は自分で小説を書いているうちは、ついそれに追われて、他人(ひと)さんの物を見るわけにゆかず。また自分のほうが小説を書き終(しま)うと、外の書物を読むために、せっかく贈ってくれられた月々の雑誌や小説を見落とすことが多いのである。が、

ちょうどこの四月は春季の雑誌の臨時増刊の物や、その他に出た各雑誌の物も奮発して読んでみた。もっとも、むろんことごとくは読まぬ。で、私が読んだ十ばかりの物は、どれも面白かった。たとえば、小栗風葉君の『ぐうたら女』、田山花袋君の『祖父母』、徳田秋声君の『二老婆』、（以上は中央公論）、早稲田文学に出ていた真山青果君の『家鴨飼』その他まだあったが、とりぐに面白かった。で、どれも面白く読んだが、その面白く読んだなかに、今までは気が注かなかったが、考えたわけでもなく、ただふと、こういうことが浮かんだのである。

それは読んだ小説のほとんどことごとくが、涙を出す物が一つもないということである。もっとも花袋君の『祖父母』には少しそのほうの傾向があったかもしれないけれども、外には一つもなかった。それでいてたいていは陰鬱なもの、厭世的のものである。むろん面白くは読んだのだけれども、何かこう圧迫を感じたような気がする――読んで愉快というのでなく旨いという意味で――ただなんとなく陰鬱な調子が大多数を貫いている。いずれもが申合せたようにこの調子で書いている。これはもちろん合議のうえではあるまい。偶然の暗合であろう。し

かし暗号でも、単におみくじを抽(ひ)いて二人(ふたり)が同じに当ったのとは違って、おのずから作家に一種の傾向が胸中にあるのが期せずして同じように現れたのだろう。それは四月に見た物についていうのだが、おそらく近来――現時我邦(わがくに)における小説はそういう傾向のものが多くはないかと、こういうことに気が注いた。で、作家諸君はむろん、自分はどういう物を書いておって、どういう調子を出そうということは、心得ておられるに相違はない。けれども読者がそれに対して泣くか泣かないかということは、その念頭にさえなかったのではないかと思う。泣か

せてやろうという考えは無論ない。さればといって泣かせるような物は書くまいという決心も普通ない話であるから、要するに泣きえないものであるということは、作り上げて気が付いたのではあるまいか。なぜ私が泣くとか泣かぬとかいうことをいうかというのは、これらの作物の大部分のシチュエーションからいうと、泣きうべき条件を具えていたように思う。たとえば、首を縊って死ぬとか、あるいは老爺さんが家財道具もなにもない一軒の荒屋から追出されるということ、その他にもこれに類した事は種々あるが、それらの所作を読んで気の毒とか

可憐（かわいそう）とかいう心はちっとも起らぬ。一歩進めていえば泣きうることができない。それはなぜだろうか。つまり悲劇の条件を具えておって悲劇のように涙を溢（こぼ）すことができないのは、考えてみるとその編中の人間が、ごく狭い意味においての現代精神を発揮しているからである。ここにいう狭い意味の現代精神というのは、自我発展の傾向をいうのである。すなわち他に対する道徳でなく、自己に対する道徳に勝ったもの、換言すれば、人に対する道徳がほとんど眼中に無いものを描いたのが多い。もう一つ言い直すと、写された人間がなんらの犠牲を払っ

ていない。社会のためにも、親のためにも、他のためにも、まずまア自己の損失をあえてする点が無い。有るかもしれぬが作には見あたらぬ。それゆえ、窮するとか、困るとか、苦しむとかいうのが、他のために窮したり、困ったり、苦しんでするのではなく、たとえ首を縊って死んでも、まあ義理人情で死ぬんではなく、世の中の圧迫で仕方なく死ぬとか、社会的情況の変化に伴れて自我を発展仕損なって死ぬ。初めから自我を縮小しようという念は少しも見えない。要するに一毫の犠牲だも他に対して払わぬ。元来気の毒だとか、同情の念に耐えぬとか

いうのは、ある意味において自分が損害を受けておらねばならぬのと、およびその損害の受け方が他の道義心を満足させていなくってはならぬ。そうでなければいくら腹を切っても、いくら困却しても、首を縊っても、ただ厭な心持ちになるばかりだ。断っておくが、こう言ったからとて作物が劣(まず)いというのではない。沈鬱(ちんうつ)な調子にはなるのだけれども、可憫な極(きわみ)、泣くというわけにはいかぬというのである。

前に挙(あ)げた作物のある物や、このあいだうち出た国木田独歩(くにきだどっぽ)君の『竹の木戸』などもそうである。植木屋

の女房（かみさん）が首を縊って死ぬ。その死ぬのを読んでみると、世の中が悲惨なものだという感じは起るが、それがため可憫（あわれ）だという感じは起らない。

そこでこの泣かせるということは、あえて上等な作物なら必ず無ければならぬというわけではない。前に挙げた作物でも、泣かぬ――泣けぬというものでも、しかも立派（りっぱ）な作物である。泣く泣かぬで、その優劣を判ずるのではないが、どんな作物は泣きえないかを考えると、要するに情操に伴わない困窮、読者からいえば情操を満足せしめない作中の人物の窮迫は、泣きえないのは明（あきら）か

である。でたとえば、イブセンの物――総体は見ないが――まア泣けない物が多い。情死（しんじゅう）をしたり、怖（おそ）るべき境遇に陥ったりしたものでも、まず涙は流さずに読む。イブセンは一種の哲学者である。哲学者といってもなにもカントやヘーゲルを研究はしないが、社会制度についてのうえの哲学者、たとえば、夫婦の関係とか、個人の自由はこの点までゆかねばならぬとか、約束的道徳は打破して宜（よろし）いとかいうについて、考えを持っている。その考えが骨子になって戯曲ができている。ある解釈からいえば、渠（かれ）の作はその社会的哲学の具体的表現にすぎな

い。そしてその哲理はなかなかに意味がある。またもっともである。あるいは流俗より一歩も二歩も先に出ているともいわれる。けれどもが、その哲理が情操化されておらない。したがってこの哲理によって行動する人物が躍然として出ても、もっともだとは思われても、行動が無理はないくらいまではゆけても、新しいくらいまでは感心されても、急に故(ふる)い世界から組織の異(こと)なった世の中へ出たような気持がしても、――どうも泣けない。その泣けないのは、編中の人物の実行する主義道徳がまだ一般に情操化されておらない。もっともある意味では社会

的にいって合理的であるかもしれない。しかし合理が合理に止(とど)まって、一種のセンチメントが付け加わってこぬ。全体道徳には思索上の道徳と、情操化された道徳と二つある。思索上の道徳というのは、今の世の中はこういう弊があるから、こう改むべきものだと先覚者が考えた結果、案出した道徳である。結構なものには違いない。しかしそれは理論で説明されてもっともだと思い、あるいは戯曲で具体化してなるほどと思うまでで、ある学者のいわゆる美学的価値は無い。価を有していない。美学的価値は情操化されて、その発現を見ると、思索の暇(いとま)な

く直覚的に評価しうるものである。しかるにイブセンの編中の人物の実践の道徳はそこまでゆかぬ。習慣に背(そむ)いたのが多い。一般からいえば、習慣に従った道徳に情操が付着しているのだから、イブセンの新道徳には情操が移憑(うつ)っておらないのが多い。それだから泣けない。そこで前に挙げた小説――我邦現代の小説の傾向は、イブセンの戯曲のように、ある哲理を骨子として成ったものとも見えないほうが多い。しかし作者にイブセンのごとき考えがないにしても、言い換(か)ゆれば作者が意識しておらないでも、編中の人物が人物相応の道徳――哲学を実践

する。（もっともその哲学が植木屋の女房や長屋の母親が発揮したりするのだから、哲理という名をつけるのは勿体ないが。）けれどもその動機が、吾人の情操を満足せしむる意味が尠い。その点においてはイブセンが書いた人物と同じであるから、なぜ泣けないかという説明は、前いった哲理を具体化したイブセンについて、なぜ泣かないかという原因を説明してしまえば、今の著作の泣けない理由も、そのなかに含んで説明ができると思う。

前にいうたとおり、作物は泣かなければならぬものではないから、旨くでき、おもしろく読んだからそれで宜

いのである。がしかし、読む物も読む物も同じ傾向であったために何か物足らない感じがした。物足らないというのはなんとなく圧迫を感じたということで、すなわち情操の満足を少しも得られなかったのである。で、その時思ったのには、なるほど人間は時々泣かずにはおられないものだと思ったことで、それは時々鰻飯（うなぎめし）や天麩羅（てんぷら）が食いたくなった意味において、泣きたくなるものだ。泣いて情操の満足を求めたがるものだろう。泣くという苦しいように聞えるが、こういう場合の涙は情操を満足した記号にすぎないのだから、要するに一種の快感の

符徴である。煎じ詰めれば、吾々は作物を読んで快感を欲しいという意味になる。そしてその快感は、笑う快感や、美しいという快感や、勇しいという快感と並び起って時々は吾々の膝の上に上ってこなければ、楚痛を感ずる時機も来るだろうと思われる。一時日本の文学がむやみに情操を発揮するので、泣かないでも済むものに泣いて、やれ菫が咲いたといって泣いてみたり、星が出たといって泣いてみたりした、まことに廉い涙の時代もあったが、これには辟易するとして、今日はその反動でこういう文学ができたとはいわぬが、しかし一部分はその反動

と見てもよろしいであろう。だからしてこれで別に不都合はない。が、出るものも見るものも、みんなそうであったら、やはり笑いたくなったり、泣きたくなったりする読者もできるだろうし、作家自身も、おのずからそちらのほうに気が向いてくるだろうと思う。

道徳というものは畢竟（ひっきょう）時世に伴わねばならぬ。だから社会の情況に応じて、思索の道徳を情操の道徳と変化する必要がある。特に今日のような過渡時代にはその必要がある。で、いたずらに情操が付着しているからといって、古い道徳を担（かつ）いでいるわけにはいかぬ。また担い

でいるうちには社会制度の変化で情操が磨り減って形式ばかり残る。それゆえ、なんの益にも立たぬと同時に、ここに偉い人が在って、今の社会制度に応じて未来の道徳を思索的に打ち建てるにしても、それが情操を具えておらなければ、やはり十分の効果を文学のうえに収むることはむずかしい。もっともよく収めた極度は、イブセンにおいてこれを見うる。しかもイブセンは泣きうべき情況を具備しながら泣きえざる底の戯曲が多いのだ。したがってイブセンはそれだけ損をしている。渠は社会の改革者（イブセン自身に思う）としての主張を貫徹する

ために、彼の作物の文学的の効果を減ずることをあえてしているといってもよろしい。

（明治四一・六・一『新小説』）

日本文学電子図書館

近作小説二三に就て

著　者　夏目漱石
制作者　宮澤一郎
底　本　「漱石全集 第 6 巻」角川書店
昭和42年7月30日 5版発行

日本文学電子図書館